

海部宣男氏ロングインタビュー

第3回：学生運動



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

インタビュー協力：小久保英一郎（国立天文台）

海部宣男氏インタビューの第3回です。第2回で伺ったように、海部氏は東京大学の大学院で天文学を専攻し、当時勃興期であった宇宙電波の研究に取り組みました。まずは通信用のアンテナで間借り観測をし、自前の6mミリ波望遠鏡を東京天文台で建設して星間分子の観測をしたということでした。ちょうどその頃、日本の大学は学生運動で大きく揺れていました。特に東京大学は大規模なストライキやテモ、建物の封鎖が起こり、1968年度の入学試験が中止されるほどでした。海部氏は東京大学の大学院生自治会の代表として、学生運動に関わります。学生運動とはどのようなもので、海部氏はどのように振る舞ったのでしょうか。またその頃の東京天文台はどんな様子だったのでしょうか。

※文章中に一部差別的な表現が含まれますが、表現の自由および話し手（故人）の意思を尊重してそのまま掲載します。

●学生運動参加のきっかけ

高橋：では、ちょっと天文学から離れるかもしれませんが、学生運動について詳しくお話していただけますでしょうか。海部さんは基礎科学の学部生のときに、原子力潜水艦の寄港問題に関わって民青（日本民主青年同盟）系のデモに参加していたということでしたよね（第1回参照）。その後、東大紛争（1968～1969年）なんかが起こってくると思うのですが、学生運動ではいろいろな団体が出てきてなかなか複雑ですね。まずは戦後になっていわゆる全学連、全日本学生自治会総連合というのができて、日本共産党の影響下にあったと。それが分裂していくわけですね。

海部：そうですね。まあそれは結局、戦後の共産党史といわばパラレルなんだよね。いや僕だって

そんなに知ってるわけじゃないですよ。だけど要するにコミンテルンってのができてき、コミンテルンっていうのはソ連を中心にして、まあ言ってみれば世界革命を目指すということを標榜したものですよね。国際共産党の徒党連合みたいなものだね。これをコミンテルンっていうんだけど、そういう中で日本共産党も活動してたわけですよ。それでまずソ連と中国は共産革命したけれども、ソ連と中国ってのはあんまりしっくりはいかなかったでしょ。で、ソ連は日本ともあんまりうまくいかない。やっぱりソ連は独裁でどんどんおかしくなっていくから、これはまずいっていうんで日本共産党が離れると。そこで、「いや、俺はソ連支持だ」って人が分裂する、というふうにして分裂していったわけ。

その中でまあ僕が学生になった頃というのは、

いわゆる極左と言われる、まあ暴力革命路線の人たちがまた共産党から分離したわけですね。つまりかつて共産党も革命というのは暴力がないと成り立たないじゃないか、という路線でいたんですが、まあそれが平和革命路線になったときに、いやどうしても暴力だという人たちがいた……、というか僕もそのへんはよく知らないんですよ。とにかく分かれて、それからまたそれがいくつかに分かれて、僕もよくわからんようなものがいっぱいできたんですよ。僕が学生になったのはだいたいちょうどその頃だと思うんだ。だから駒場に行ってみたら、いろんな立て看板が乱立してて、という時期ですね。

僕はまあ高校時代なんかは別に政治色があったわけじゃないから、むしろ大学に入ってから基礎科学科で学生自治会を作ろうということになった。基礎科学科というのはそのときできて、僕らが1期生ですね。ご存知の大隅（良典）君は基礎科学科の僕の1期下ですね。だから大隅君たちは第2期で、僕は彼のこともよく知ってるんだ。それで自治会を作って、僕は割とその中で中心的な1人だったと思いますけどね。

高橋: 3年生のときってことですか？

海部: そう、3年のときね。そのときには僕らは、今じゃ当たり前かもしれないが、先生の講義の点数を学生が付けて印刷してばらまいたりですね、結構いろいろと暴れたわけ（笑）。そういうので活気もあった。そこへちょうど、前にも少し話したように、原子力潜水艦が日本に来る来ないって騒ぎがあって、まあ当然我々は反対で、原潜反対運動というのをやった。僕は駒場祭で「原子力潜水艦とは何か」という展示を作ってね。

高橋: アメリカのシードラゴンという原子力潜水艦が日本に最初に寄港したのが1964年ということなので、まさに海部さんが基礎科学科にいる頃にその問題が出てきたわけですね。2年生までは、学生運動には関係しなかったんですか？

海部: ほとんどなかったねえ。まあ、あんまり自

分が政治に関わるって気はなかったし。やっぱり原潜問題というのがきっかけだったように思いますね。とにかく政府の説明が支離滅裂だし、こんなことでは困ると思ったよなあ。

高橋: 社会的にもかなり大きな問題で？

海部: 大きな問題でしたね。だから基礎科学科で、原潜寄港反対デモで横須賀まで行こうっていうんでみんなで決議した。それを先生に言ったら「おお、行って来い行って来い」って休講にしてくれるっていうようなことがごく自然にあったわけです。もうクラス全員で行っちゃうの。ただまあクラスの中にはやっぱりちょっとこんな民青のデモはかったるいからって言って、勇まし声で行ってケガして帰ってきたやつもいたしね。そういう時代なんだよね。まあ僕としてはどっちかという、科学ということに最も関心があった。

高橋: 海部さんは学生運動のいろいろな派閥というか、グループの中でいわゆる民青系ということなんですね。

海部: はい、こう言っちゃなんだけど、その後全共闘（全学共闘会議）と言われた人たちってのは、なんかこう僕から見ると非論理的なんだよね。とにかく極めて感情的で。まあやっぱり僕としては暴力は好かんから、民青系と言われるようになったわけです。というか、基礎科の自治会自体にそういう人たちが多かったし、割と自然にそうなった。その頃のデモは分裂前のいわゆる全学連ですね。まあ僕にとってはどっちを選ぶってよりも、なんかごく論理的に自然のことですね。

高橋: 海部さんとしてはあくまで関心は科学にあったと。

海部: ですからまあ科学で、世界なり日本なりをどうするのかとか、それから日本の科学体制ってのはどうも非常に脆弱なんじゃないか、とかまあそういうことを考えてたんですよ。だいたい4年の頃は、結構生意気だったのかな。「日本の」ってのが付くんだよ、科学ってときに。それがずっと僕は尾を引いてるんだと思いますけどね。

だから、後の方でも話しますが、研究機関の共同利用とか学術の大型計画ということになってやれたのは僕にとってはとても嬉しいんだ。つまり天文を離れて、日本の科学全体を進める体制をね、若干でも僕は作れたと思ってるんで、まあ嬉しいと思ってるんです。

高橋: 日本学術会議やマスタープランのお話ですね。これはまた後でじっくりお聞きしますが、大学生の頃からそういうことを考えていたということですか。

海部: だから僕の関心は科学にある。政治にあったんじゃないんです。けども、やっぱり世の中を何とかしなければいかんという気持ちは、あの頃の若い人にはすごく強かったんですよ。今はちょっと考えられないと思うけど。今はもうほとんど政治からの逃避に近いでしょ、若い人は。小久保さんの頃はどうでした？

小久保: 我々がたぶんぎりぎりまで、まだ大学の銀杏並木で演説があったりとかいうのがあった最後くらいだと思います。ただもうその頃すでに、例えば旧帝大の中では東大はもう活動はほとんどないと。東北大とか結構まだ激しくあったりとかいう、そんな頃でした。

高橋: 僕の頃はほとんど表には見えてなかったですね。

海部: 原子力潜水艦はまさに科学、僕にはすごく好適なテーマだったんだろうな。それでそういうデモンなんかにもしょっちゅう行くようになったし、関心を持つようになった。それで僕は基礎科を出て大学院で天文教室に行くわけですね。

●大学院生協議会

海部: でね、学生運動の話はこれからがある意味本番でね、大学院に入ったら今度は当然ながら大学院生協議会というのがあったんですね。今はあるかどうか知らないけど、東大大学院生協議会って、東院協っていうんだよ。で、東大の大学院生協議会があって、全院協、全国大学院生協議会と

いうのがあった。これはいわば大学院生版の全学連ですね。で、まあ僕はやっぱり結構活動して目立ってたからさあ、なんかマスターの時にまだどうもよくわからんのに、「ちょっと、なり手がなから東院協の委員長やってくれ」って言われて引き受けちゃったわけだよ。僕はそういうの、やれって言われるとやっちゃう方だから。で、東院協の委員長になったわけです。

高橋: それは理学系だけじゃなくて、東大全体のものですか？

海部: 東大全体。理学系には理院協というのがあったんです。他にも教院協とか、まあ要するに各学部ごとに大学院の協議会があって、その全体の統合が東院協で、各大学が集まってくると全院協ってなるんだけど。

で、その頃はやっぱりずいぶん盛んでねえ、大学院生の活動としては政治だけじゃなくてやはり科学体制とか、それから科学と社会とか、そういう問題を取り上げようという雰囲気はずいぶんあったわけだ。僕は当然そういうのに関心があった。そこには非常に優秀な人たちが集まっていたと思うね。僕が、こいつはできるなあと思ってた連中ってのはやっぱりみんな立派な学者になってますね。例えば高エネ研の所長やったりとか。そういう連中と東院協と一緒に議論したり、デモに行ったりした。だから今から考えるとびっくりするような話かもしれないが、まあ真面目だったんですよ、本当に。

それでまあ東院協の委員長になったでしょ。ところがですね、東大紛争が始まったのがちょうどこの頃だったかなあ。43青医連って言って、43ってというのは昭和43年のことで。

高橋: 1968年ですね。東大紛争のきっかけは研修医の待遇問題だと言われてますね。

海部: やっぱり医者の世界は今でもそうだが遅れてるんだよ、すごくね。それで抗議運動が起きて、こじれてこじれて、それが東大紛争の始まりなんだよね。今から思うとそんなことで大紛争に

なるなんてのは信じられないでしょうが、まあその頃はほら、成田闘争でもわかるように、やっぱり極左の連中が火をつけちゃったんだ。彼らは怒るかもしれないけれども、僕からいうとやっぱり暴力を伴う左翼運動は極左だと思う。で、もうにっちもさっちもいなくなっって、医学部を封鎖しろとか壊せとかいう話になって、だから僕らから見ると、あれは全く必然性のない話だった。ただそれが東大改革とか、そもそも大学がけしからんとか、大学を潰せとかどんどんどん発展しちゃったんですね。

高橋: 元々は単に医学部だけの問題で。

海部: 最初は医学部の話だったし、しかも医学部の小さな部局の話だった。それがどんどん大きくなっていった。だから僕はそれに積極的に参加するつもりは全くなくて、僕らは大学院生の地位の改善っていう運動をやったんですよ。僕が東院協の委員長になった時にメインテーマにしたのがそれだった。つまり、大学院生ってのは将来の学者、研究者の卵であると。それが全く学部生と同じで、要するに奨学金をもらって苦学してというのは、国の将来にとってどういうことだと。僕は親父が判事でしたから、判事に関してはよく知ってた。つまり法学の方はちゃんと育成制度があるわけです。弁護士になる、検事になる、判事になる、っていう3つの道を歩むための司法修習生、要は大学院に近いのがあって、それは給料が出るんだよ。それからその当時、世界的にはやはり大学院生っていうのはほとんどが給料をもらっているわけ。まあ今でもほとんどそうですけど。日本だけが一切そういうのがない。どうしてそうなっているかっていうと、要するにお前らは自分のために勉強してるんだと、自分のために学問やってるんだと、そんなの応援する必要はない、というのが日本国の基本的な姿勢なんですよ。それは今でも実は変わらないの。

高橋: 今はTAとかRA^{*1}とか多少あるところもあると思いますが、海外に比べると全然でしょうね。

海部: ついでに言うと、僕は大学院に入ってびっくりしたのが、大学院生には旅費というものが一切出なかったんですね。学会に行こうが、発表しようが、観測に行こうが、旅費っていうものはない。僕なども観測には自腹で行ったんです。それで僕は天文の連中で相談して、教授に談判をしますね、少なくとも学会で発表するときには旅費を出せと。やっぱり天文の先生はなかなか物わかりが良くてさ。みんなで科研費からちょっとずつ出し合って、じゃあ大学院生でこれを管理しろって言って、院生旅費の委員会を作って。それで学会発表に行くときには旅費が出るようになったんですよ。あれは僕が頑張ったせいもあると思うな。僕が言い出さなきゃあんなこと言い出すやしないから。

小久保: へえ～。

高橋: 院生に自分たちで管理させるっていうのがまたすごいですね。

海部: まあ僕のやってたのは、学生運動って言ってもそういうものなんだ。組合に近い。ですからそれをもっと全国的にね、大学院生というものを将来日本を支えるものとして、ちゃんと援助、支援すべきであるというのが僕らが全国大学院協議会でやった一番大きなテーマだったんですよ。

高橋: それは非常に地に足の着いた活動ですね。

海部: そうですねえ。まあ僕はそういうものだと思っただけだし、なんていうのかなあ、ちょっと口はばったいけど、自分のいるところで最善を尽くすってのはもうある時期から僕の主義なんですよ。やれないことを言ってもしょうがないじゃないですか。だから自分がいて、できる範囲で一番いいことをやりたいな、と思っただけから。その意味で言うと、自分が大学院生協議会をやる

*1 ティーチングアシスタントやリサーチアシスタントなど、大学院生が講義や研究などの補助をするアルバイト。

ならやっぱりそういうことやると。で、僕は東大でそういう提案書を作って。

今でも覚えてるよ、全国大学院生協議会の全国大会が京都であってさ、東大の委員長だから行かなければいけないわけですよ。それでお寺で合宿みたいにしてやるわけだ。そうすると京都のお寺はね、そういうのを応援してくれるわけ。そういうお寺がいくつもあってね、ほとんどただで泊めてくれるわけだ。そういうところに泊まり込んでねえ、安い飯食って、それで毎晩ガリ版を作って。僕は上手だったんだよ。ガリ版って知ってる？

小久保: 小学校の時に先生がやりました。

海部: ガリ版ってのは、ざらざらのやすりのでかいのがあってね、鉄の板なんです。それに鉄筆っていうのでね、ロウを両面に引いた紙があるわけだ。で、それを載せてその上でこう字を書いていくんですね。で、謄写版っていうインクをローラーにこう載せてね、こうやって刷るんだよ、1枚1枚。で、上手にやると千枚くらいできるんだよ。それで印刷物とかビラを作るんです。

高橋: 学生運動というと、そういうイメージが強いですね。

海部: そういう活動でねえ、僕、実はすごく鍛えられた。1つは思考力。つまりそういう組織で運動するってのは、運動方針を出して、わかりやすく説明して、しかもそのなんていうのかなあ、効果のあることを考え出さなきゃいけないわけじゃない。だからその思考力がものすごく鍛えられるわけだ。それともう1つは文章力。つまりねえ、ガリ版であらかじめ下書きなんて書いてる暇はないわけですよ。いきなり鉄板を敷いて、ロウ紙を敷いて、鉄筆でガーンと書くわけ。だからあれってほとんど直しがきかないんだ。大変なんです。指先が痛くなるしね。だけどね、あれを徹夜でやるようなことをずいぶんやりましたからねえ、あれで僕は文章力だけは鍛えられたと思う。まあだんだん年取って来てコンピューターを使う

ようになってからダメになったけどね。

そういうわけで、僕は本当にその大学院生協議会の東院協、全院協にはずいぶん鍛えられました。全院協でも東院協でも、別に民青系で独占とかそういうんじゃないから、いろんな考えや組織の人がいたわけです。

小久保: いろいろ派閥はあったんですか？

海部: 派閥はあって、そういう人たちも出てくるじゃない。で、そういうのと論戦しなきゃなんないんだね。ちゃんと論戦するんですよ。その頃はまだいきなりゲバ棒って時代ではなかったから、論戦するんですね。そうすると当然ながら向こうにもまあ結構しぶといなかなか鋭いのがいるわけだし。だからそういうのとも渡り合うというのですねえ、結構ありましたよね。それはまあ、東大の中でもあったし、全国大会でもあったし。

高橋: そういう論戦は東院協とか全院協の方針を決めるときによってことですか？

海部: それはですね、主に大会の時に起きるわけです。執行部っていうのはどっちかっていうとしたい民青に近い真面目な人が多かったし、そういうところでは建設的な議論ができた。先輩で、全院協の書記をやった人がいてね、農業経済をやった人だ。僕はすごい人だと思ってたね。世の中にはこういう人がいるということを知っただけでもね、やっぱり素晴らしいですよ。しかも分野を超えてるんだから。教育系の人とも議論するし、それはすごく良かったよなあ。まあ忙しくて大変だったけど。

高橋: 執行部の中では建設的な議論ができたんですか？

海部: そうです。だからいい方針も作れるでしょ。で、それを大会で提案する。提案すると「反対!」とかいうのがワーッと、まあそういうこともあったけど、だいたいその頃はやっぱり民青系の団体が圧倒してましたね、特に大学院では。学部はまあそうでもなかったかもしれない。大学院はもうほとんど圧倒的だった。それはまあ

考えてみれば明るいじゃないの。だって大学ぶっ潰せて建物に火をつけるような人たちとやれないよね。ですから僕がやったのはそういうことです。

●東大紛争

海部: ただ結局東大紛争になっちゃった。そうなるよねえ、まあそれまでのようないわばのんびりっていうわけじゃないが、じっくり落ち着いて建設的なことをやろうっていうことはほとんどできなくなってくるわけですよ。特に東大には全国の大学から全共闘が入ってきちゃって、大学を封鎖するってことが起きてね。だんだん運動が激しくなってくると、僕はゲバ棒とかいうものは一切持ちませんでしたけれども、ヘルメットだけは被らざるを得なかったよね。天文で一緒にいた大学院の仲間の横尾広光君なんかも封鎖反対って。民青系は大学を封鎖させない、大学を破壊するなど。大学は改革すればいいけど破壊はすることはないだろう、というのが僕らの立場だから。それに対して全共闘の方は破壊しろっていうわけですから、封鎖を次々として結構被害を与えたわけですよ。そういうせめぎ合いの中で、例えば民青系がデモしてると、全共闘が4階の屋上からその真中に石を落とすんだよ。

高橋: えっ?!

海部: それってあり得んようなことでしょうか? 実際、横尾君はヘルメットかぶってたんだけど、貫通して頭蓋骨を骨折した。まあヘルメットのおかげで大事に至らなかったけど。そういうこともあるし、それから僕らは理学部1号館、前の古いやつだけど、あそこに学外から全共闘が来るっていうんで、それを封鎖させないためにあそこにこもってた時期があるんですね。1週間くらいあそこにこもってたかなあ。寒かったよ、新聞を敷いて寝たりして。それで全共闘がデモに来ると、ピッピッピッて笛が鳴って・・・、それが僕はもう後々まで耳について離れなくて。だから夜寝て

ても、なんかこうピッピッピッていう笛の音が耳に響いて寝られないとかね。僕はあの時に胃を壊したと思うんだな。あれはねえ、ひどいもんでしたよ。まあ僕はそういうのを見てるからねえ。彼らが集まっちゃあ「殺せー」とかいうのを見てるから、僕はもう全共闘に関してはもう金輪際許せんという気持ちが今でも強いです。

そうやって攻めてくる全共闘の中に天文の仲間もいるんだと思うと、本当に嫌な感じがするわな。天文教室はまあだいたい民青系の人が多かったと思うんだけど、中間ももちろんいたし、全く逆の人もいた。ただもちろん天文教室の中ではあんまり表立って対立しなかったですね。やっぱりしたくないじゃない、同じ仲間でねえ、毎日顔合わせてるんだから。嫌な時代でしたよ。

高橋: 海野和三郎さんが学生の相手をしたって話をしました。

海部: まああの頃は、主任だとか部長ってのはみんなそういう交渉の相手であり、例えば林忠四郎さんなんかは理学部長で、大学の門まで全共闘に担ぎ出されたって話があります。そういうのはしなきゃならなかったわけね。まあ大変だったでしょう、先生も。

ともかくその頃の全共闘ってのは、あれはほとんど気がいだったんです。日大全共闘なんて、確かに初めは日大の民主化を目指していて、日大当局にひどい弾圧を受けた。けどその後、極端に暴力的になっていった。本当に狂犬みたいなものだったよ。僕らに対しても「殺せ!」って言うんだよ。信じられない。あれはもうただただ混乱とその後の反動化、日本の革新運動の停滞を招いたと思ってますね。でも全共闘をいまだに賛美する声が多いのは、本質を全くわかってない。だいたい実際全共闘で中心になったような連中のかなりが、その後は右翼になったわけ。

高橋: でも、元々左翼の運動なんですよな?

海部: だからねえ、左翼も右翼もいったいどこで区別するんだと。暴力を持ち出したら、途端にそ

こで本質は全く同じになっちゃう。暴力をもって世の中を変えよう、従わせようとした途端にもう本質的には何も変わらない。テルアビブ事件とか、浅間山荘事件って知ってますか？ もう悲惨な事件だったね。あれがまあ行きつくところなんだよね。僕はもうそれに対しては断固戦ったと思うんだ。それだけは言えるわね。

小久保: 海部さんが委員長だったのは、マスターの頃ですか？

海部: マスターの1年の後半。1年の後半からだったけど、1年やったんだよなあ。だから1年から2年にかけてですね。

高橋: そのときにちょうど東大紛争ですか？

海部: そうですね。だけど東大紛争が本当に本格化したのは、僕が委員長をやめた直後くらいです。だから僕は東大紛争のさなかに委員長をやったわけではない。その後はもう本当に何が何だかわからなくなっていっちゃうんだよ。

小久保: 安田講堂の事件があったときは、ドクターになっていたんですか？

海部: 僕はねえ、安田講堂事件の時はドクターだったと思います。僕はドクターになって、D1で結婚したんですよ。女房はまあ学生時代に駒場で知り合って、一緒にデモにも行ったりしてたわけですけど、ちょうどその頃が東大紛争が非常にひどくなって、という時期なんですよ。それと重なるんだなあ。で、僕は理学部1号館で籠城してたんだけど、とうとう機動隊が入ってくるって話になって、僕らはもう手を引こうということで、我々はもう全部手を引いたんですよ。それまでは防ぐとか言ってやってたんだけどね。まあこれも言っといたほうがいいけど、僕らが理学部1号館に籠城してた時に全共闘は攻めてきて何をしましたと思います？ 入り口に火をつけたんだよ！信じられないでしょう？ いやあもう僕はそういうのを全部知ってるからねえ。全共闘の人たちみんながみんなそういうことをやる意識はないってことはもちろん知ってるけどさあ、中にはそうい

う凶暴なのがいるんですよ。

高橋: それは本当に物理的に破壊しようということなんですか？

海部: そうだよ。

高橋: 籠城してたのは、そういうのから守ろうってことなんですか？

海部: そうですね、やっぱり大学は我々が勉強している学問の府でもあると、それを破壊っていうのはそれは許せんですよ。

高橋: 本当に暴力的なのは、全共闘の中の一部の人たちなんですか？

海部: だと思っねえ。だってそんなにみんながみんな暴力的になれるかねえって思うんだよ。とにかく凶暴なのがいいたのは間違いありませんよ、うん。そういう人たちが最後の最後までそういうふうになっていったんじゃないの。まあ集団心理っていうのは恐ろしいからなあ。

でね、1つ覚えてるのは僕がまだそうやって理学部に籠城とかなんかしてた頃に、もう疲労困憊してたけど天文台にも顔を出さないといけない。あるとき、たまには行かなきゃと思って泊まり込み明けで三鷹に行ったんだよ。そしたら何してたかという、みんなで模型飛行機を作って大会やってたの(笑)。どうも僕はそのときなんか怒ったらしいんだ。「こんなときになんてのんきななんだ！」って(笑)。僕は覚えてないんだけど、森本(雅樹)さんに後でだいぶ言われたからね。というくらい三鷹はのんびりしててね。東大で教授会が開けないんで、三鷹でやったくらいなんですよ。まあそういう時代だから、天文台はなんかちょっとやっぱり間延びしてたなあ。

高橋: 対比がすごいですね(笑)。

小久保: 基本的にあそこで戦ってたのは、東大の中の人たちだったんですか？ それとも全国から来てた人たち……。

海部: 最初のうちは東大だけだったけど、外からどんどん入り込んできた。特にだからさっき言った凶暴なのが、日大全共闘っていう。

高橋: 全共闘側と話し合いとかはしたんですか?

海部: 話し合いにならないよ, うん. 僕が学生の頃は学生大会とかがあってガンガンやり合ったもんですよ. そりゃあ議論だからいくら議論したっていいわけで, 最後は採決するわけだから. だけど東大紛争でゲバ棒というものが現れてからはもう話し合いにはならなかった. 全くなならない. でも例えば天文教室なんかではやったですよ. だってそうしなきゃみんなと一緒に行動できないからね. けどもそれがもっと大きい場になると, もう話し合いはできない.

高橋: 対立の構図は民青と全共闘と大学っていう三つ巴なんですか?

海部: 民青っていうとちょっと語弊がある. 民青っていうと団体でしょ. 民青系というならまだいい. 別にみんながみんな民青ってわけじゃなくて, やっぱり民青の言うことがいいと思う人たちが集まるわけで, そうじゃなきゃ大勢集まるわけがない. 全共闘だっていろいろ実はあって, 系と呼ぶべきでしょう.

高橋: はい. それで大学はまた別の立場なわけですよ?

海部: 大学の中はまた先生によっていろいろですか. 基本的には大学を守るっていうのが大学の立場ですよ, 先生方はね. けどもまあ助手, 助教授の中には全共闘に味方する人がいたよ, 何人か.

高橋: そうなんですか, へえ~.

小久保: 天文教室にも?

海部: 天文教室にはいなかった. 大部分はもちろん民青系だったんだけどね, なぜ全共闘があれだけ世の中でもてはやされてるかという点, 1つにはかっこよさ. 三島由紀夫みたいな. もう1つは, 反共です. つまり共産党に対するアンチテーゼだ. 僕は今でもある種の共産党シンパですよ. だって基本的に言ってることを虚心坦懐に見たら, 共産党が一番僕の意にはストンと落ちるもんね. それはそう. だけど僕は共産黨員じゃありません. 要するに共産党に対するアンチテーゼとい

うものは非常に強い原動力です. それが全共闘をあれだけ押し上げた原因にもなってる.

高橋: 民青系と全共闘系は話にならないということでしたけど, 大学側とは何か話し合いがあったんですか?

海部: 大学側とは, 僕らは結構話をしましたよ. けども先生の中にはやっぱり共産党は嫌いだ, 民青は嫌いだっていうのがあるからね. そういう先生は反発するし, まあそれはいろいろだよ. もちろん全共闘に賛成な先生はほとんどいないさ. だから大学もどっちつかず. でもそもそもは大学の後進性とか封建制が医学部で問題になったわけね. そのことはどっかすっ飛んじやったわけだ. だから大学もあんまり反省しなかった. 結局あれから何が得られたのか. まあ僕から見ると, 荒唐だけです.

高橋: じゃあそれをきっかけに大学が何か変わったわけではないんですか?

海部: ないですね. まあこの辺はいろんな思いをした人, 経験した人がいるから違う意見もありましょうけど. それで機動隊が大学に入ってきて, 例の安田講堂の攻防戦になったわけだよ.

小久保: まさにあれが行われているときは, 海部さんは本郷には行かなかったんですか?

海部: 行きませんでした.

小久保: 三鷹の方に行ってたんですか?

海部: 三鷹に行ってたかもしれないけど, とにかく本郷は入れる状況じゃなかったしね. 弥生町の天文教室辺りには行けた. 天文教室の講義は結構やりましたよ.

高橋: そんな状況でもやってたんですね.

海部: あんまり勉強は身につかなかったかもしれないけど, やっぱりやるべきことはやんなきゃいけないから. でも本郷ブロックはもう全然立ち入れる状態じゃなかった.

小久保: じゃあ1号館にも人が入れない状態だったんですかねえ.

海部: もうそうになってましたね. いやあ実をいう

とよくわからない。最後の最後のぐちゃぐちゃのときはどうなったか。ともかくもう大変な数の機動隊が入ってきたし。

高橋: 東大紛争が落ち着いた頃に助手になるという感じですか？

海部: そう。その騒ぎで僕を助手に採用するという教授会をなかなか開けなくて、半年くらい遅れたんだ。だからその頃はもう教授会を本郷で開くのが危ない状況だったんでしょうね。よく知らないけど、それで助手になったのが、ドクター1年の1月か何かでしょう。だから2年になるちょっと前ね。安田講堂事件って、何年？

小久保: 1969年1月みたいですよ。

海部: 1969年1月。するとですね、まさにそのときだ。僕が博士課程中退助手というのが1969年1月です。

小久保: じゃあまさにそのときだったんですね。はあ〜、すごいな。

海部: いやあ、大変なときだよ、もう。あんなのは二度と経験したくないね。

高橋: 安田講堂が最後の騒動で、それで収まったんですか？

海部: そうです。その後、まあすぐにはいかなかったけど、いろいろ荒らされた後の修復とか、時間がかかったところもあります。でも例えば天文教室は場所が離れてたからね、そういう被害は一切受けてない。だからあんまりそれとは関係なくできたんじゃないかな。でねえ、その後、大学における左翼的と言っていいかわからないけども、まあ革新的な運動ってのはほとんど結局影を潜めた。でも右翼は残ったんですよ。その後、彼らがやってきたことは、左翼運動のまねをして組織を作って、ずうっと来て今はすごく巨大なものになってます。

●職員組合

海部: それで僕は助手になったら学生運動はもうおしまいになって、組合を始めたわけ。天文教室

だから天文台の組合じゃなくて、東大理学部職組に入ったわけですよ。当然のように入った。そうは言っても僕は宇宙電波のグループの一員なので、天文台にも僕の機があるわけだ。で、その頃になるとそろそろ1969年でしょう？ 1969年というと、前の話と重なってくるわけで、1968年に6mのミリ波望遠鏡を作り出すわけですよ。

高橋: 6mを作るのと東大紛争が同じ年というのは、ちょっと頭の中で結びつかないですね(笑)。

海部: それから1969年というともう、45mの話が出だすわけです。僕はそういう話にも入ってたし、6mの方は最初はちょっと紛争であれでしたけど、紛争が片付いてから僕は6m建設にズボンと入っちゃったからね。だからもう結局本郷にはほとんどいなくて、基本的に三鷹に行ってた。で、組合があるときだけ本郷に行くど、そういうふうな生活を僕は9年間続けたわけ。

それでも結構一生懸命組合をやりましたよ。だからね、職員組合というのは僕にとってみれば学生運動の続きみたいなもので、やっぱり職場とか待遇とかの改善だよ。ただ、今と違って国家公務員ですから、給与体系が全部決まっちゃってるわけだ。だから動かしようがないんだ。待遇改善しろとか給与アップしろって言ったって、それはむしろ全体で政府に対して要求するということになる。だけど、特に事務職とか技術職の人たちの待遇は非常に良くなかったから、まあいろいろ改善の余地はあったんですね。研究職の方はまああんまり給与改善とかそういうことを言う気もないし、むしろ研究の方が楽しいわけだからね。だけど事務や技術の人に関しては残業とかです、それから昇格をもっとちゃんとやれとかさ、そういうある程度組合で対処できるような問題がいくつもあった。基本的にはそういうことをやってた。

で、僕は1978年に東京天文台へ移った。面白いことに、天文台の組合は森本さんなんか委員長を何度もやって、古在さんも何度もやってるんだよ。研究職で組合に入っちゃんとやる人っ

て、割と少ないわけ。今も少ないよね。いるにはいる。どういうわけか、電波の連中ってのはなかなか盛んでね、そうやって組合に入る人も多かったし、委員長をやった人も多し。あれは面白いもんだねえ。1978年というのは、どういうタイミングかという、野辺山の予算が通ったんだ。その前の年に決まって、1978年から建設が始まったんですよ。だからそのタイミングだ。それで僕は天文台に移って、すぐに助教授になった。

小久保: 最初は助手として？

海部: 僕は助手で移ったような気がするなあ。というのは、助教授のポストはそのときなかったから。で、建設が始まるんで、助教授のポストが付いたんですよ。それで1979年に助教授になったんだと思う。

で、学生運動の続きで言うと、組合は良かったよ。組合をやると何がいいってね、もういろんな人と知り合いになれるんだよ。まず事務の人とか秘書の人とかのきれいだころと(笑)。それから技官の人とか守衛さんとか、そういう人と仲良くなれます。すごくいいですよ。僕、いまだにそういう人と付き合いがあるもの。守衛さんと年賀状のやり取りとか。あれは良かったねえ。で、そういう人たちと一緒に飲んだりもするし、大変楽しかった。

高橋: 普通に過ごしているとなかなかそういう方たちと仲良くなれる機会はないですよ。

海部: たださっき言ったように、天文台の組合ってというのはやれることに限りがあって、国家公務員の組合ですからね。僕がやったたぶん一番大きな仕事は、技術系の人々の待遇問題なんです。技術系で非常に優秀な人がいるんだけど、そういう人でも技官っていうともう給与レベルが低いんだ。頭打ちっていいね、年功で上がって行ってそこまで行くともうそれ以上給料が上がらないの。そこからずっと同じになっちゃうんですよ。それは非人間的ではないかって言ってね。で、それを助教授に渡れるようにしろという運動をやったんですよ。

これはなかなか簡単なことじゃない。技術系から助教授に移る。「渡る」と称するんだけどね。

それだけの技術を持っている指導的な人、例えばすばるで頑張った野口猛ですとか、それから電波でいうと長根潔とか、宮澤敬輔とか、ああいう人はねえ、もう立派に助教授の資格があるくらい本当に優秀でした。僕はすばる教わったからね。まあそういう人たちを助教授にしろというので大運動をやって、これが大成功で、東大総長のところまで交渉に行ったりしてね。どうとう天文台でそういうのを始めたんですよ。これはたぶん僕の功績だな。

小久保: 海部さんからだったんですか。

海部: うん、何をやったかというね、このまいくとどうなるかっていうグラフを作ってね、僕はそういうの得意なんだ。で、このままそういうことに対応しないと、技官のままそれ以上上がらない人たちが何年には何人になるかっていうでかい表を作ってね、ロビーに張り出したんです。ロビーに張り出してあるんだからみんなが見るもんね。これはインパクトがあったと僕は思うな。

小久保: 東大総長まで行かないとダメなんですかね？ 台長の権限とかじゃないんですね。

海部: いやああのね、台長が総長と相談すればできるんだよ。だからそのために総長に談じ込んでおいたわけ。で、台長を動かして、ともかくよく動いたと思いますね。あれはねえ、僕はある意味感謝されたわけですけど。

高橋: 技術系の人もちちゃんと評価されるようになったと。

海部: でもそれは苦肉の策だった。やっぱり技術系の人を研究系で処遇するっていうのはあんまりいいことじゃないよね。で、今は法人になってそれをしなくてすむようになったの。これは非常に良かった。法人になるとそれまでの給与体系とは別に自分で作れる。でもあまりいっぺんに変えるわけにいかないから、技術系の人を技術で処遇するために、技師という資格を作って、もっと高い

ところまで行けるようにした。それで技術系の人にどっちがいいかというアンケートを取ったら、やっぱり大部分の人は自分は技術で評価されたいというので、じゃあ技師にしましょうと。それから無理やり助教授にするということはないですむようになった。それは法人化のおかげでね、非常に良かったよ。まあそんなことをやってました。だからまあ僕の学生運動や組合運動ってのはそういうもので。

高橋: 法人化についてもまた後でお聞きすることにしましょう。

小久保: そういうことを積極的にやろうとするのは、海部さんがずっと学生の頃から持っている、ある種の正義感じゃないですけど、なんていうんですかね、やらない選択もあるわけですよね？そこでいつでもその活動をやらざるを得ないというのは、どういう……？

海部: そうだねえ、不思議だねえ。僕はなんかやるのが当たり前だと思ってて、そういう意味じゃちっとも苦にならなかったしね。むしろ面白かったし。だけどまあ大変だったよ。まあねえ、言われてみれば僕は子供の頃から正義感というのはすごく強かった。それはたぶん親父が判事だったせいもあるかなあ。まあでも兄貴はそれほどでもないから、わかんないよねえ。だけど正義感には強くて、クラスでだれかいじめられてると絶対黙っていられなかった。

高橋: お父様から何か教えがあったんですか？

海部: いやあ、教えというほどのものは特にないよ。そんな親父じゃなかったよ。だけどとてもいい親父でしたね。僕はそう思った。別に判決の話とか仕事の話とかはしないしね。だけどなんとなく判事っていうものの持つ意味というのは、多少刷り込まれている可能性はあるけれど。まあ1つには出しゃばりなんだな。なんか黙ってられないみたいなどころがあって。ただ、あの頃の雰囲気もありますよ。やっぱりねえ、学者だろうが研究者だろうが、社会のためになんかきやいけないと

いう。少なくとも僕は大学を出るときに1つの決心があって、学者である前に人間であるということは絶対忘れないようにしようという自分なりのあれを持ってたから、うん。

小久保: なぜそう思うようになったんですか？

海部: なんですかねえ。

小久保: たぶんそれは、海部さんが海部さんたる所以だと思うんですけど(笑)。

高橋: 小学校とか中学校とかで生徒会長とかされたんですか？

海部: 僕は小学校を4つ変わったけど、行く先々ですぐ学級委員長になりました。そう言っちゃなんだけど、まあ僕はできたらしいんだよ(笑)。昔はなんかそうだったらしいんだよ。今はできる子を選ぶっていう時代じゃなくて、僕はその方がいいと思うけども、なんかともかく行く先々でぐなったね。

(第4回に続く)

謝 辞

本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

A Long Interview with Prof. Norio Kaifu [3]

Keitaro TAKAHASHI

Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: This is the third article of the series of a long interview with Prof. Norio Kaifu. When the 6 m millimeter-wave telescope was being built at Tokyo Astronomical Observatory in 1968, Japanese universities were significantly upset by the student movement. In particular, the University of Tokyo suffered from large-scale strikes, demonstrations, and blockades of buildings. Prof. Kaifu was involved in the student movement as a representative of the association of graduate students. What was the student movement like and how did Prof. Kaifu behave there?